

親の責任、国の責任 ～日本の教育を取り戻す～

月例研究会／2014年1月28日／都市センターホテル・コスモスホール

櫻井 日本国の一番の問題は教育だと思います。経済ももちろん大事ですが、それと同じか、それ以上に教育が大事です。日本は立派な日本人あってこそその国家です。そのよき日本人、未来に希望を託せる日本人をどうやって育てていくのか。まず、下村博文文部科学大臣のお話を伺ってから、議論を進めていきたいと思います。

下村 私は、森有礼文部大臣から数えて百四十七代にあたるそうです。その歴史の中で初めて、教育再生担当大臣兼務ということになりました。そこで、わが国の教育の中にきちんと背骨の入った改革をしていきたいと、今、四十四にわたる項目の工程表をつくり、ドラスティックに教育改革を進めているところです。

その一つとして、学習指導要領の解説書を改訂しました。国家を形成する要素の一つに領土があります。これまで、北方領土については明確に教えられていたものの、竹島、特に尖閣についてはまったく教えられていませんでした。

韓国や中国は、それぞれの立場で、かなり詳細に竹島、尖閣を記述しています。そのため、日本の中学生、高校生が韓国、中国の中学生、高校生と議論をしても、まったく話になりません。日本の生徒たちは教えられていないのですから、当然です。今回、解説書の中で、領土問題を明確に教えるという位置づけをしました。

本来、学習指導要領の中に入れるべき事項ですが、指導要領は十年に一度の改訂ですから、前倒しをしたとしても、五年ぐらいかかってしまいます。今回、その前段階として指導要領の解説書に入れたということです。それでも、中学は平成二十七年度、高校は二十八年度からになります。そこからは、公民、歴史、地理のすべての教科書で、領土について明確に教えていくことになります。

マスコミから、そうしたことに対して近隣諸国から抗議が出るのではないかという質問がありました。しかし、独立国家として自分の国の領土を子どもたちに教えるということと、近隣諸国に対して丁寧に説明をすることとは別問題です。こういうことをおもねっていたら、背骨の入った教育はできないと思います。わが国固有の領土ですから、教育の中で教えることは当然だと思います。ただし、外交上は、理解してくれるかどうかは別にして、丁寧な説明はしていきます。

もう一つは、昨年一月に設置された「教育再生実行会議」の課題の一つである、いじめ問題の対応としての道徳教育のあり方、道徳の教科化があります。そこに向けて、文部科学省の中に「道徳教育の充実に関する懇談会」を設け、有識者の一人として、細川珠生さんに入ってもらいました。民主党政権は、自民政権のときに使われていた『心のノート』という教材を廃止してしまいましたが、これを復活させました。しかし、これまでの『心

のノート』も十分な教材ではないと考えていました。懇談会の提言を受けて、道徳の時間に『心のノート』という名称は適切ではないという意見もあり、『私たちの道徳』という教材をつくりました。これは今までの教材から比べると、ひいき目に見ても十倍ぐらいは充実した内容になっていると思います。

子どもたちの発達段階に応じて、社会のルールやマナー、規範意識をきちっと教えることは、国境を越え、歴史を超えて、人が人として生きる当たり前のことです。それを当たり前のこととして教えていないこと自体が問題で、それが今、日本社会のマイナスの現象として現れているわけです。実際、そうしたことを習っていない子どもたち本人が一番苦労するのですから、四月からは、この教材でしっかり学んでほしいと思います。

民間の教科書はすべて検定教科書です。ですから、『私たちの道徳』は教科書ではなく、教材です。しかし、これを一つのモデルとして、民間にどんどん参入してもらって、「この教材こそ、子どもたちに望ましい内容だから、ぜひ使ってほしい」というものをつくっていただきたい。そして、道徳を「特別の教科」と位置づけ、いい教材が使えるようにしていきたいと考えています。また、どんな教材が出てくるかわかりませんから、学習指導要領もきちっと改訂しておかなければなりません。その前の段階として、解説書の改訂をして領土の問題等を入れたわけです。

今日のテーマの中に、家庭教育があります。自民党が野党のとき、これから家庭教育を充実していく必要があるという趣旨で、高橋史朗先生に支援してもらいながら、私が事務局長、安倍現総理が当時会長になって、超党派の「親学推進議員連盟」を立ち上げました。百人ほどの議員連盟でしたが、この中で、家庭教育推進法をつくるべく勉強会を重ねてきました。

その後、政権交代によって、安倍会長が総理になり、私が文科大臣になって、議連の活動が難しくなったため、山谷えり子先生に事務局長、安倍会長の後は、河村建夫先生に会長になっていただき、再スタートしました。この中で、家庭教育の充実についてしっかり議論し、議員立法として国会に出すべく加速度をつけてもらいたいと思っています。

わが国の危機的な状況の中で、今、大きな過渡期にあたって、家庭教育や道徳教育をきちっとやれるかどうかは、日本を立て直せるかどうかのポイントになると思います。

道徳という教科のある国がいくつかありますが、その多くは、それぞれの国の宗教を教えるというものです。わが国のように、特定の宗教宗派にとらわれず、いいものをトータルで見ながら、その中で人が人として生きる、ある意味では人間学的な部分での道徳を目指すことができる国というのではないのでしょうか。そして、道徳教育をきちっとできれば、必ず他の国に対してモデルになるはずですから、徳育はもっと自信を持って捉えるべきではないかと思います。

宗教も含めて、古今東西の文明をすべて統合していく中で、いいものだけを取捨選択し、咀嚼した結果、和の精神というような、ある意味では日本文明の核とも言えるような今の道徳観、思想的な部分が生き残ってきているわけです。たとえば、昔の人たちは、「お天道

さんは見ているよ」と、当たり前のように言っていました。そうしたことを、道徳という学問体系の中で、子どもの発達段階に応じて教えるものにできたとき、これは、人が人として生きるための原理原則になります。そうした意味でも、日本こそ、どの国もがぜひ活用したいと思う根本的なものができる時代が来ているのではないかと思います。

二〇二〇年に東京オリンピック・パラリンピックが実現することになりました。これはまさに天が日本に与えてくれた恵みだと思います。六年後を目標に、日本がスポーツの祭典だけでなく、文化、芸術、そして今述べたような、人が生きるための、あるいは人類が目指すべき崇高な価値観を日本がしっかりとつくり、世界に発信していくことこそが今日本に求められていると思います。

安倍総理といっしょにスイスのダボス会議（一月二十二～二十五日）に行ってきました。ダボス会議はこれまで四十三回開かれています。開会式のメインセッションで日本の総理大臣がスピーチしたのは初めてです。これは、「ジャパン・イズ・バック」というアベノミクスに対する期待感ばかりでなく、日本に対する期待感です。

昨年、富士山が世界文化遺産になり、和食も世界無形文化遺産になりました。日本に対する諸外国の方々の期待と憧れは、われわれが思っている以上です。いつまでもデフレを引きずる「心のデフレ」から早く脱却して、日本こそが、これから世界に貢献し得る国であるという自信を持つべきだと思います。そのためにも、しっかりとした経済と共に、しっかりとした教育の立て直しをしていく必要があるのです。

私は、ダボス会議と同時に行われていた世界大学学長会議に出席しました。世界トップレベルの二十三大学の学長が参加している中で、日本の大学入試改革や大学のガバナンス改革など、教育再生に向けた改革について説明をしてきました。実は、日本の教育改革は同時に、他の国の課題でもあるのです。日本の改革に対する期待感が非常に強いということも改めて感じました。

教育によってこの国を立て直していく。誇り得るような国と誇り得るような若い人たちを育てていく。その先頭に立って頑張っていきます。

櫻井さんには中央教育審議会の委員をお願いしました。今まで、中教審には日教組から必ず誰かが入っていました。今回、日教組のメンバーを外しました。櫻井さんに入ってもらいましたから、日本の教育の背骨がしゃきっとしていくと思います。

櫻井 まさに教育が日本国の未来を開いてくれると思います。大臣からは総合的なお話をいただきました。次に、下村さんの後を継いだ山谷えり子さんをお願いします。

山谷 私は第一次安倍内閣のとき、教育再生担当の総理補佐官でした。そのときに、「確かな基礎学力と豊かな心を」ということで、教育再生を始めたわけです。「ゆるみ教育」を見直し、しっかりとした教科書をつくりました。あれから六、七年、昨年の先進国の学力テストでは、日本は読解力と科学的リテラシーという読み解く力が先進国で一番になりました。残っているのは、高等教育です。そして、美しい心を育むという課題を第二次安倍内閣、下村大臣のリーダーシップの下で、確実に実らせていきたいと思っています。

その中で、学校だけではなく、家庭そして地域社会の教育力をいかに上げていくかということが難題です。教育基本法にはそのへんがしっかりと書かれていますが、それを応援する財政的支援、あるいはそのために働いてくださる人々を育てる、そうした場所をつくっていく法律がありません。そこで、今、家庭教育支援という法律をつくっているところです。今国会で成立させて、予算を付けていきたいと思っています。

安倍内閣は、復興・経済再生、教育再生、そして外交・防衛の強化が三本柱です。しかし、教育再生はすぐ目に見えるかたちにはなりません。だからこそ、地道にやれることすべてをみんなで心を合わせてやっていくことが大事です。美しい日本人がいなければ、美しい経済成長にはなりません。まず、人材が大事だと思います。

安倍内閣は女性活力の促進も方針に掲げています。とてもいいことですが、反面、何事も行き過ぎると副作用が出るということがあります。たとえば、待機児童解消が行き過ぎると、家庭の中で愛着形成をすべき時期に母子がふれあう時間がなくなるという懸念もあります。今、安倍内閣が長く続きそうだとということで、厚労省はこのときとばかりに、保育所に入る子どもたちに対しての施策をどんどん進め、予算を取ろうとしています。また、「子ども・子育て会議」は先々週（一月十五日）、月四十八時間のパートのお母さんにも、月二百十二時間まで保育利用を認めるという、ちょっと不可解な方針を打ち出しています。そこで今、私たちは自民党の中で、望ましい子どもが育つ「保育のあり方」について議論し直しているところです。

たとえば、一歳まではきちんと家庭で保育できるように雇用保険法の改正をして、お金の支えがあって休めるようにしようと、これも今国会で通そうと思っています。すでに、改正育児休業法の中では、三歳までの子どもがいる親は六時間勤務を認めるということも成立しているわけですから、やはりバランスが大事です。私は、自民党の役員会でも、「遠心力をきかせるときには、必ず、求心力のことを思ってください」と、総理にお願いしています。

また、『晋三父さんプロジェクト』をやったらどうですか」ということも提案しました。保育園や幼稚園に総理が出向いて、本の読み聞かせをする。あるいは小学校では、日本の美しい心について、いろいろなエピソードを語るなど、子どもの心を育てることを日本の総理が、「晋三父さん」としてやっていただきたいと思っています。

心を育てることは、分量で量ったりすることができません。だからこそ、中途半端でなく、一生懸命に長く続けていきたい。そのための根拠法となる法律をぜひ今国会で成立させていきたいと思っています。

櫻井 山谷さんが提示した問題は、大事なポイントだと思います。待機児童をゼロにすることはもちろん大事です。しかし、子どもたちをどう育てていくのが一番いいのかという家庭の問題も、頭に入れておかなければなりません。

本当に日本人らしい日本人を育てるにはいったいどうしたらいいのか。戦後なぜ、私たちは教育問題にこれほど深い懸念を抱かざるを得ないのか。幕末、明治に日本に来た外国

の人々は、この国の教育、子育ては世界一だと、無条件でほめちぎっていました。果たして今、私たちの国は同じ評価を得られるのかと言えば、得られないだろうと思います。その理由を考えながら、今日は、子どもたちを本当によいかたちで育て、子どもたちの心まで含めたすべての能力を発育させるにはどうしたらいいかということ念頭に話を進めていきたいと思います。冒頭は高橋史朗先生をお願いします。

高橋 「親学」について三つのポイントで問題提起をします。第一は、なぜ今親学なのか。一言で言えば、子どもと親の変化が劇的に進んでいるからです。

精神科医の岡田尊司さんは、著書『母という病』の中で、いかに母性が崩壊しつつあるか、いかに親心が衰退しつつあるかを医療現場の立場からはっきりと書いています。岡田さんは『脳内汚染』をはじめとして、『愛着障害』、『愛着崩壊』という本を出しています。

愛着とは、お母さんが子どもをしっかり抱きしめるということです。その愛着の不足によって、子どもたちの「心のコップ」が下を向いていて、うつ、引きこもり、虐待、いじめ、孤立、不安、発達障害の二次障害など、さまざまなかたちで影響が及んできています。

例を挙げます。ある市で小・中学生の調査をしたところ、抑うつ傾向の小学校六年生が一四・四%、中学一年生は一七・八%です。北海道の全道調査では、中学生で抑うつ傾向が二三%と、二割を超えています。また、別の市の平成十八年の統計によると、「生きていても仕方がないと思う」と答えた男子一三%、女子九%。「よく眠れない」と答えた男子二七%、女子二三%。さらに、「自分は駄目な人間だ」と答えた高校生は、中国一三%、アメリカ二二%に対して、日本はなんと六六%です。

国立教育研究所が、小学校四年から中学校三年生まで、六年間追跡した「いじめ追跡調査」では、いじめを経験しなかった子は一割、つまり九割はいじめられたか、いじめた経験をしています。しかし、「いじめられても誰にも相談しない」と答えた子は、東京都で四五%もいます。私が埼玉県教育委員長をしているときの調査では、埼玉で三九%です。日本の子どもが、いかに孤独な状態に置かれているのか明らかでしょう。

児童虐待は二十年で四十倍になっています。新しいかたちの学級崩壊「新型学級崩壊」が進んでいますが、岡山県の県教委の調査では、平成二十三年七月から十二月までのわずか五ヵ月間で、小学校は十九校から四五校に、中学校は六校から十二校に倍増しています。

先ほど下村大臣が話された親学推進議員連盟の勉強会を五回した中で、私はある学校の映像を見てもらいました。安倍総理は「これは休憩時間ですか」と尋ねました。私は「いえいえ、休憩時間ではなく、授業中です」と答えましたが、それほど秩序のない学級になっているということです。

多くの教師が今、学校を辞めるところに追い込まれています。学級崩壊が、日本全体に大きな問題になったのは平成九年からです。そして、平成十六年からは馴れ合い型学級崩壊に転化しました。それは、友だち親子、叱れない親、子どもの壁になれない親が増えている状況の中で、秩序の崩壊が起きているということです。

『母という病』には、子どもと友だちのようなお母さんが増えてきたということが書い

てあります。あるいはキラキラネーム（愛猫と書いて、きてい。輝宙と書いて、ぴかちゅうと読むペットネームのような名前）の問題があります。

先日、山口県の教職員団体に呼ばれて行きました。「なぜ私を呼んだのですか」と聞いたら、教え子に子どもが生まれ、黄色い熊、黄熊と書いてプーさんという名前を付けたというのです。先生が「あなた、おかしいよ。プーさんと言ったらおかしいでしょ」と言っても、教え子は「いや、個性的でいいでしょう」と。これはどういうことなのか、全然理解できないという話でした。

私は親心の衰退と言っていますが、親としての心に異変が生じています。私がアメリカに留学していた一九七六年から一九八九年の十三年間で、アメリカの虐待は六十万から二百四十万へと四倍に増えました。一九八一年、マリー・ウィンが『子ども時代を失った子どもたち』という本を出しました。その中で彼女は、「子育てを大切な義務と考え、子どものために犠牲になる親はいなくなった」と書いていました。これがアメリカの状況でした。同じことが今、日本に起きているのです。

世界価値観調査という七十三カ国の調査によると、「親が子どもの犠牲になるのは仕方がない」と答えた世界の親の平均は七二・六％です。日本は三八・五％で、七十三カ国中の七十二番目です。

渡辺京二さんは、『逝きし世の面影』の中で、江戸末期、日本にやってきた外国人が、日本の子どもたちは笑顔に溢れていて、礼儀正しいと書いているのを紹介しています。それから百五十年で、日本の子どもはすっかり変わりました。それは親が変わったからです。

私は、政府の「子どもと家族を応援する日本重点戦略検討会議」の委員として中間のまとめをする段階のとき（平成十九年六月）、官僚がつくった案の中に「親も責任を持つ」という文章が削除されていたので、「なぜ親も責任を持つという言葉を入れないのか」と猛抗議したことがあります。「いや、親も責任があると言ったら、ストレスがたまって虐待が増える」という返答でした。親の責任ということに対して、日本は疑問符を投げかける傾向が強くあります。PTA全国大会で「教育の責任は親にある」と私が言った後、官僚の方が「育児と介護の責任は社会にある」と言ったので、聞いていたお母さんから「親か社会か、どっちだ」と質問が出ました。そこで「どちらかではありません。まず、親が第一義的な義務、責任を担い、それだけでは足りないから地域の絆、社会全体の絆、行政の絆で支えていく必要があるということです」と答えました。

日本人はフランス、イギリス、アメリカの現状をあまり知りません。フランスでは親が教育義務を放棄した場合、二年の禁固刑、三百六十万円の罰金を科しています。イギリスは子育て命令法（Parenting Order）を制定して、違反した場合には二十五万円の罰金、滞納した場合は禁固刑です。アメリカは十三歳未満の子どもは常に親が保護義務をもつべきだと「子どもを置き去りにしない法」をつくっている州がありますし、子どもが学校に行かないのは親の教育ネグレクトであり、怠慢だという考えがあります。

アメリカにいたとき、ホームスクールが百万件を超えているという新聞記事を読んだこ

とを今でもよく覚えています。

「なんですか、これは」と聞いたら、「学校になんか行かせられないと、親が子どもを教えているのだ」ということでした。教育の義務は単なる就学の義務ではなく、教育をする義務なのだという意識を持った親がたくさんいるということを知りました。

親学には、親になるための学びという意味と、親としての学びという二つの意味があります。これまで、職業人になるためのキャリア教育はどこでも行われてきました。しかし、最も大事なものは親になるための準備教育です。その準備教育が欠けているのです。親になるとはどういうことなのか。オギャーと子どもが生まれたら親になるというのは肉体だけの話です。親育ち支援とっていますが、親が親として成長発達することを支援しなければ、親心は育ちません。子どもの発達と親の発達に問題が生じているのなら、本来持っている発達力を引き出すためにどんな支援が必要なのかということが、これからの課題だと考えています。

親学ではまず、「主体変容」というのが基本理念です。それは他に責任を転嫁しないということです。たとえば、保育所でわが子が鼻水を流していたので、お母さんが保育士を呼んできて「鼻水が出ていますよ」と注意しました。保育士は保育料をもらっていますから「お母さん、鼻を拭くのはあなたです」とは言えません。そこで、議員の皆さんに向かって保育園長が「待機児童なんていません。待機親がいるだけです」と言いました。そのとおりなのです。

二番目は、発達段階に応じた関わり方について学ぶ必要があるということです。まずは愛着。生まれてきてくれてありがとう。存在が宝ですと、丸ごと受容する。次は下に下ろす。子どもの壁になる。愛着は母性原理、下に下ろすは父性原理で、「ならぬことはならぬものです」と子どもの壁になるということです。教育は、自分を律することができるようになって初めて、自立することができるようになる。他律によって自律へと導く行為です。

親学の三つ目は、父性原理、母性原理、優しさの愛情と厳しさの愛情が必要だということです。教育のゴールは自立ですが、その前に親の役割があります。しっかり抱きしめて、下に下ろしてという「優しさの愛情」と「厳しさの愛情」を示す必要があります。

私はNHKの「おはよう日本」という番組で五分間解説したことがありますが、保育園の先生たちが子どもの発達に二つ問題が起きているということを発表しました。社会対人関係能力の未発達と自己制御能力の未発達です。この二つの能力を人間力とか生きる力とか言っています。社会対人関係能力のベースにある、人の痛みがわかるという共感性は、愛着を通して、親との一体感を通して人の気持ちがわかり、社会と人とうまく関わっている力が育つということです。愛着がなければ、その能力も育ちません。

すぐキレてしまう、自分で自分を抑えることができないかという自己制御能力の低下は、「ならぬことはならぬもの」と熱く関わる親、特にお父さんがいなくなったからです。

また、「TVタックル」に出演したとき、中学生の八割に反抗期がなくなったというVTRが流れました。それは熱く関わるお父さんがいなくなって、友だち親子になってしまっ

たからです。私は中曽根総理のときの臨時教育審議会の中間報告で「いじめっ子は三歳児で発見できる」という提言をしました。共感性、恥、罪悪感といったものが育ってくるのは三歳までなのです。

そうならば、小学校に入ってから初めて、弱い者いじめはいけないという道德教育をするのでは遅いのです。もちろん、学校の道德も頑張らなければなりません。しかし、もっと大事なのは、小さいころに親が子どもとどう関わるかです。このことが今問われていると思います。日本の教育は根が枯れて、幹が腐りかけています。対処療法では間に合いません。もっとも大事なのはいじめの予防です。それには、まず親が家庭でやらないといけません。そういう教育を広げていきたいと思っています。

櫻井 高橋さんが話された中身は凄まじく深刻な日本国の教育の実態です。これを受けて、子どもたちの教育に素晴らしい情熱を持ち、政治の世界に入られた義家さん、政治の立場から、今、提起された問題にどう対応できるのか、また、実際、どうしているのかについてお話しください。

義家 今の問題提起は非常に重要な根幹に関わるものだったと思います。親への愛着が子どもの将来を決定づけるという話でしたが、それを言われると、実は胸が痛いのです。というのは、私は零歳のときに両親が離婚したため、父親方に引き取られて、明治生まれの祖父母に育てられました。父は会社経営をされていてずっと家にいませんでしたし、物心ついたときには、すでに母がいなかったわけですから、両親への愛着というものがありませんでした。母親がどこにいるのか、生きているのか死んでいるのか、名前さえ知らない状況でした。その反動で、父親とよく衝突を繰り返して、やがて不良少年と言われるようになってしまったわけです。

しかし、私はそのときから、出会ったあらゆる人たちとの関わりの中で、自分の生き方やあり方を自ら考え、自分で自分を育て、自ら選択し、自ら親になり、そして、自ら責任を全うしている、と思っています。だからこそ、教育再生は今、何よりも必要だと考えています。

先日、ある書道家から書をいただき、いたく感激しました。そこには「親子同歳」と書いてありました。これは真理だと思いました。私の息子は今十歳です。ということは、私が親になってからまだ十年しか経っていないということで、子育ては一つ一つが試行錯誤です。そして、教育再生を言いながら、私は子どもが寝ている間に家を出て、子どもが寝静まっているとき家に帰るという生活です。最近、妻が息子の朝起きが悪く、朝ぐずるようになったと言いました。原因は私にあります。私が夜中に帰ってきて、寝ている息子をコネコネするからです。きっと、それによって、ノンレム睡眠からレム睡眠に眠りが浅くなっているのでしょう。しかし、いっしょにいる時間がすべてではないとも思います。役割分担の問題です。その点で、ジェンダーフリーの考えは、完全に間違っていると思っています。

たとえば、山谷先生は今、参議院政審会長ですが、女性だからなっているのではありま

せん。その能力があり、その重責に耐え得る人物だから、要職を担っているわけです。男だから、女だからという話ではなく、男女それぞれが、性差を理解したうえで役割分担をすることが大事なのです。

息子が小さかったころ、妻がお風呂入っている間、私が子どもの相手をしていましたが、どんなにあやしても泣き止みません。たまたま、妻に出てきてもらいましたが、妻が抱いたとたん、ぴたっと泣き止むわけです。

つまり、そのとき必要な親としてのアプローチは、それぞれの役割分担の中で行うべきではないかということです。女性の社会進出は大事です。しかし、それは能力のある、あるいは適性のある、あるいはチャンスが不当に制限されている人に対して大事なのであって、女性の社会進出が母親の責務を全うしなくていいということでは、まったくないと思いません。

むろん、生活の状況や支援してくれる親がいるかどうかなど条件はいろいろありますが、私は自分の経験からも、子どもを零歳で託児所に丸投げしてしまうのは、児童虐待にも値すると思います。私の場合は、祖父母がいたからまだよかったと思いますが、まったく知らない人の中に入れられた子どもは、「あなたがいるから社会進出ができないのだよ」といった親の雰囲気を実感に悟ると思います。

親が大事だとはみんな思っています。親に対してしっかり教えることも必要だと思っています。では、誰がいつどこでするのか。たとえば、今日のようなセミナー、あるいは学校でも、教育委員会が進めている家庭教育学級などがあります。そこに出席してくれる人は基本的に問題がない人です。問題があるのはそこに来ない人です。そもそも、無責任な人はそんな場に来ません。

そこで、どうすればいいのか。これには二つの方法が考えられます。一つは母子健康法に定められている乳幼児健康診査の教育化です。一歳未満の乳児、一歳六ヶ月から二歳まで、そして三歳から四歳までの幼児に対して、市町村が法定で行う健診がありますが、これは単なる健診です。まず、この乳幼児健診というマストの法律に基づいたものを通して、親としてどんなことをしなければならないのか、親としての責任を果たしているかどうかについて、病院の先生や看護師さんに丸投げするのではなく、しっかり見守っていくことです。

二つ目ですが、乳幼児健診が終わったら、すべての親が一堂に会する機会はありません。親に対する教育的なアプローチもできませんが、実は一つだけあります。それが学校保健安全法第十一条に定められている就学時健康診断です。これは教育委員会の主催になります。小学校に入学する前年の十一月三十日までに、すべての子どもは学区の小学校に行つて健診を受けなければなりません。このときは、さすがに幼稚園の年長さんに書類を持たせて一人で行かせる親はほとんどいません。子どもを連れて親もやってきますから、まさにここが最後のチャンスだと思います。

この法律を見直すか、別の法律をつくって、まず子どもは単に健診するだけではなく、

しっかり席に着いて学校のルールを学ぶようにします。これは夏休みに行うことが望ましいと思います。というのは、夏休みは生徒にとっての休みであって、教育公務員の休みではありません。夏休みの間、先生方が教室で責任を持って子どもたちと向き合う機会をおよそ一週間あるいはそれ以上つくっていくことです。

そして、その間は子どもと別に、親の教育です。たとえば、今インターネットなどが一般化して、東京では、小学生の六割、七割が携帯電話を持っています。しかし、携帯電話をクリックすれば、無修正動画が簡単に見られます。ゲームもかなり危険なものです。そんな危険性もわからないまま、みんなが持っているから、便利だからと言って、子どもに買い与えてしまいます。こういうものにはこういう危険性がありますよという当たり前のことを親にもしっかりと伝える。そして、買い与えるからには、親も責任を負ってほしいということも明確に伝えていく。こうした対話をしていくべきだと思います。

子女に普通教育を受けさせる義務があるのは親ですから、少なくとも普通教育を受けるときには、「学校教育と連動して、しっかり親としての責任を果たします」というような誓約書を書くぐらい重要なものです。学校に丸投げして、学校だけを責めるようなモンスターは、子どもを守るためにも、責任を取ってもらわなければなりません。

給食費の未納が二十二億円です。その中の六一%が保護者の責任や規範意識の低下によるもので、三三%が経済的理由になっています。しかし、要保護世帯は給食費を免除されていますから、未納の問題など教育現場の崩壊は無責任と無知の二つが原因なのです。ですから無知の場合はしっかりと知恵を教える。無責任の場合は責任を取っていただく。このシンプルなことを入口のところで問い直さなければならぬと思います。

指導より支援を大事にすべきだという考えで、子育ての法律はだいたい支援法になっています。しかし、本来は道がわからない人には道を示し、導いてあげる。そして、その道の中で素晴らしい可能性に対してはどんどん支援していく。それが前提であって、親としてのあり方を逸脱した人にはしっかりと指導ができる体制を整えることも必要です。給食費を未納している親は、給与の差し押さえをすべきだと思います。子どもがあまりにもかわいそうです。四千円ですから、携帯電話で一万円使うなら、子どものために給食費を払うのは当たり前の話です。「義務教育だから、無料にしてください」などと言う前に、責任を取ってもらわなければ困ります。雛が飢えているのに親は知らないよ、自然が守ってくれるだろうなどは動物の親でも考えない、まったくおかしい論理が蔓延しています。

さらに、マスコミでも時々話題になるモンスターペアレント。本来、親がモンスターであってはならないし、怒ること自体がおかしいわけですから、一切媚びずに毅然たる対応をすべきだと思っています。

いずれにしても、就学時健診の機会以外に、すべての子ども、すべての親が集まることはありませんから、ここの法整備の議論をこれからもしっかりと進めていきたいと思えます。

櫻井 日本は国家もメディアも有識者も、親の責任ということになると遠慮してしまいま

すが、考えてみたら、子どもを育てるのは第一義的に親の責任なのです。

そこで、子どもをどのように育てたらよいのかわからないという若いお母さん、お父さん方を現場でたくさん見ている辻由紀子さん、若い親たちが直面している問題点は何なのか。何が今最も深刻だと思われるか。

辻 なぜ、私が子育てに関する仕事をするようになったかと言えば、義家議員もそうでしたが、私も実体験からなのです。私は十八歳で結婚しています。その前は地域のつながりが濃厚にある、いわゆる村社会で育ちました。私の父は小学校の先生でしたし、祖父は民生委員をしていましたので、ほんとに地域の中で教育をしてもらいました。

それが十八歳で、できちゃった結婚をしてしまい、二十三歳で離婚することになりました。元夫が働かないうえに、育児にいきい手を貸してくれない人だったので、生活が続かなくなったというのが離婚の原因でした。シングルマザーで暮らしていくと、本当に多くの壁があります。簡単に子どもは育てられないし、悩むことがたくさんありました。

そして、実際、仕事をし、子どもの世話をし、家事をしている中で、ぎりぎりの生活をしていると、高橋先生が説明された子どもに対して愛着を感じる気持ちより、しんどい、苦しい、辛いというほうが強くなってしまいました。これは何か原因があるはずだ。どうしたら自分が変わるのだろうか。そうした疑問を解決したいと思い、通信大学の教育学部と社会福祉学部で学ぶことにしました。なぜ、愛着を持たない親が育ってしまうのか。本来、子どもを愛すべき母親が不安を抱えていると、どうして子どもをかわいいと思えなくなるのか。そうした研究を自分を実験台のようにして進めました。

その結果、原因が見えてきました。そこで、今度は支援する側に立って、今、子育て中のお父様、お母様にその知恵を伝えています。また、その現場を通して見えてきたこともたくさんあります。

私の娘が今年、二十歳になりました。その娘が、「生きているだけで人ってすごい。そのことに感謝できる人が一番すごい。だから、どんな環境に生まれても、生きていることに感謝できていたら、自分は成長できる。それに気づかせてもらったのは、お母さんが育ててくれ、お父さんのことは覚えていないけれど、やっぱり両親がいたおかげ。今こうして大学生生活を楽しんでいるのも、両親がいたから自分の命が今ここにあるのだから両親にすごく感謝」と成人式のときに私に言ってくれました。

子ども・子育て支援は、チャイルド・ファースト。まず子どもに対して支援をということで、子どもに関する支援はいろいろあります。ところが、児童虐待と言っても、実は男女間の暴力が増えているから、結果として児童虐待の数が増えているのです。男女からしか子どもは生まれませんので、この男女の関係をよくしてあげないと、親子の関係は良くなりません。

私は今、四十歳ですが、核家族が進んだ世代なので、私の世代の男女の関係は、やっぱり家父長制度、パターナリズムが主流でした。モデルになるのが自分の親しかいないわけです。また、私たちの世代には離婚家庭で育っている人もたくさんいます。その場合、モ

デルになる対象がいません。モデルがない場合、何を拠り所にするかといえば、他人の教えであったり、受けてきた教育だったりします。しかし、その教えもどこからも受けていません。だから、夫婦関係をうまく支え合うためにどうすればいいのかもわからないし、どうやって親子関係をよくしていったらいいのかもわからないのです。

私は、親学推進協会の理事をしていますが、私自身、親学の学びを受けたとき、親のあり方をこれだけ簡潔明瞭に教えられるコンテンツがあるのだから、より多くの人に知ってもらえば、暗闇の中でロウソクの明かりもなく、どの道に進んだらいいのか悩む方が、ずっと少なくなるだろうと思いました。

今はできちゃった結婚が増えていますので、すぐに出産してしまいます。そうすると、学ぶ機会がありません。ですから、小学校、中学校、高校と段階を踏んで、親になるということはこういうことですよ、夫婦というのはこういうものですよ、ということを教えていかなければなりません。私の考えている男女共同参画は、ジェンダーフリーで男性女性の区別、差別がないということではなく、赤ちゃんを産んでおっぱいが出るのは女性だけなので、男性と女性の性差を認めていくということです。まずは夫婦の中で補い合い支え合いができたなら、子どもはそれを見て、支え合う親子関係や人間関係をしっかり自分でつくっていくことができると思います。

いじめも結局は、夫婦間のいじめとの関係です。子どもはそれを見て、そのまま同じことをしてしまっているのです。補い合い支え合っている家庭なら、いくら子どもがいじめを受けて帰ってきても、家庭の中でしっかりと支えてもらうことができます。今、社会で居場所づくりということもされていますが、本来、子どもの居場所は家庭であるべきなのです。家庭で温かい気持ちをたくさんもらって、自分はここで生きていていいのだという自己肯定感を育めたら、社会で自己肯定感を育めなくても、土台はしっかりつくれるのです。

社会の基本は家庭です。その基本、土台が緩んでしまうと地域も揺らぎ、社会全体が揺らいでしまいます。そこで、社会に居場所を求める前段階として、自分の帰れる家庭、「ただいまっ」と言える暖かい場所をつくらうといった活動をしています。そして、こういう場に来られない人が実は一番大変ですから、若い世代の人たちに伝わるよう、インターネットを通じたり、私が足を運んで出向いたりしながら動き回っています。

今、問題なのは、学ばず、モデルもないまま夫婦になり、親子になってしまっていることです。せめて、一定の学びというか、「道しるべ」のようなものは国の責任でつくっていただきたいと思います。

櫻井 若い人たちが結婚生活に入るとき、モデルがないのは、親がそうした姿を見せなくなったということなのですね。これは、現場で若いお母さん方、お父さん方の悩みを聞いてきた辻さんの話だけに、日本の社会のある種の異常さを示しているのではないかと思います。

細川さんは、政治評論をしながら教育問題、日本人としての子育てなど、いろいろお考

えだと思いますが、ご自身の体験に基づいてお話しいただければと思います。

細川 今、小学生の息子がいます。私はフリーのジャーナリストとして、二十代から活動をしてきました。フリーという形態を選んだ理由はいくつかありますが、一つは櫻井よしこさんに憧れてということがあります。また、結婚して子どもができて、仕事が続けられる環境をつくっておきたいというのが、もう一つの理由です。

私はバブル世代ですから、今の就職難などとはほど遠い、売り手市場でした。同級生たちは、二社も三社も内定をもらうような状態でしたから、就職活動をしてよかったのですが、私は結婚して子どもが生まれた場合、仕事か子どもかという選択がたぶんできないだろう。そして、仕事は一生続けたいと思っていましたから、あえてこの形態を取りました。

しかし、どんな働き方であれ、仕事と子育てを両立させていくことは、本当に大変でした。何が辛いかと言えば、まず寝不足です。子どもがいようがいまいが、二十四時間という誰にも等しく変わらない時間の中で、やらなければならないことがたくさんありますので、最終的に睡眠時間を削るしかありません。九年間の子育てで、寿命が五歳ぐらい縮んだのではないかと思うことがありました。

「私がこんなに寝る時間を削ってやっているのに、どうしてあなたはいつまでも寝ているの？」ということが私のストレスの根源でした。主人の稼ぎがあつてこそ、私の生活が成り立っているということは頭では理解していました。私も仕事をセーブして子育て中心の生活をしてきましたが、仕事の量は違っても、仕事に対する責任感は同じはずだと思っていましたので、「よく平気で寝てられるな」と、とにかく寝ていることが許せなかったのです。

夫婦がうまくやっていくには、男性にかなり努力してもらわないと難しい。確かに女性が強くなっていますが、もっと強くならないとバランスが取れないだろうと思います。

主人といっしょに子育てをしてきて、生き物が違うということを度々、実感しました。私から見ると、男性は基本的に一つのことを突き止めていく、簡単に言えば一つのことしか見えてないということが多くは思いましたが、女性はお母さんをやり、妻をやり、あるいは娘をやり、そして、料理を作り、掃除をして、毎日、いろいろなことを同時多発的にやらなければなりません。私は親しい友だちの中ではかなり「男前」と言われて、自分でも母性に溢れた性格ではないと思っています。それでも、自分が約十ヵ月お腹の中で育てた子どもと対面をすると、何があっても、私はこの子を絶対を守るという気持ちになります。それが、女性と男性との一番の違いではないかと思います。

今、「待機児童解消加速化プラン」、「放課後子どもプラン」など国もいろいろ子育て支援を進めていますが、実践しないと気づかないこともいろいろあります。

たとえば、インフルエンザで学級閉鎖になると、子どもはすぐ家に帰されます。ところが、お母さんが外に出ていないというとき、子どもはどこへ行けばいいのか。小学校高学年になれば、一人で留守番もできますが、低学年ではまだ難しい。

それから、台風や雪などで朝突然、学校が休みになると、私の予定を全部組み換えなければならないということがあります。また、夏休みなどの長期休暇の期間、仕事に行くには子どもをどこかに預けなければなりません。学童は四年生以上になると原則、児童クラブに通えなくなります。そうすると家に子供だけで置いておく。すると子どもたちはゲーム漬けという、悪い方程式の流れになっていきます。安全面でも問題です。こうしたことをいろいろ考えていくと、今、安倍内閣が強く進めている女性の就労支援、再就職の支援なども、山谷さんのお話にもありましたが、副作用が必ずあると思います。

ですから、小学校の最低でも低学年までの間は、母親が子どもを中心とした生活ができるよう社会の整備を進める必要があります。時短を認めるのは当たり前だと思いますし、子どもが帰るまでの間だけ仕事ができる。あるいは、一人の仕事を三人、四人でワークシェアリングをしていく。そうしたことができれば、女性の働き方にもバリエーションが出てきて、社会とのつながりができ、また自分の収入があることで、母親の心理はだいぶ変わります。ただ、それをするのは企業ですから、そこに国の支援が手厚くあればいいと思います。とはいえ、一番大事なのは、親が子どもを育てていることの重要性を自覚することだと思います。

今、女性の就労者の内、非正規雇用者が五五%、正規雇用者は四五%ぐらいで、非正規雇用が正規雇用より一〇%ほど多い状況です。また、再就職を望んでいる人が三百三万人ほどいると言われていますが、その七割の人が非正規雇用でいいと言っています。

そこには家庭を中心にやりたいという意志もあるので、国が「正社員になりなさい」とあまり言う必要もない気がします。また、管理職を望んでいる女性は一割ぐらいしかいません。それを三割まで上げようというのは、女性の望むところと少しズレがあると思います。女性が子どものこと、あるいはもう少し年齢が上になると、介護のことを考えると、正社員として、あるいは管理職として責任あるポストを与えられても、それを全うできないと考えている人が多いということも、知ってほしいと思います。

私は子育てして十年足らずですが、毎日わからないことだらけで、先日、義家さんに私のラジオに出ただけだったとき、子どものゲーム対策を聞いたほどです。ゲームが子どもに与える影響は本当に大きく、特に低学年までの子どもには百害あって一利なしだと思います。しかし、そうした問題を親が学ぶ機会がありません。

おそらく、親が一番関わるのは保育園、幼稚園、あるいは小学校ですから、そうしたところで、ある程度の強制力を持った親の学ぶ場を定期的につくる必要があると思います。家庭教育支援でも、子育て教育だけではなく、幅の広い知識を持つための教育も大事だと思います。親自身が知的に向上していき、広い視野を持った中で子育てをすることは、必ずいい効果を生むと思います。

子育てはすごく体力を使い、疲れしますので、夜、新聞や本をゆっくり読もうと思っても、なかなかできません。そこで、子どもが家にいないときとか、母親たちが動きやすい、親が参加しやすい時間帯で学ぶ機会が設けられ、さらに、それに参加した場合、勤めている

企業はそれを有給外の扱いで休暇を認めるとかいったことを含めて支援することが社会全体としての取り組みになるのではないかと思います。

櫻井 ここまで、多くの問題が提起されましたが、辻さん、今の細川さんの話を受けて、若いお母さん、お父さん方は、どのように問題整理をして子育てにあたらいいのかをお話してください。

母親が愛情を込めて、一生懸命子どもを育てることが大事であると、みんなわかっていると思います。と同時に、共働きの夫婦が圧倒的に多くなっている中で、働きましよう、女性の力を活用します、という国全体のあり方と、子どもはやっぱり親が育てましようという二つの相反する部分を融合させる方策をつくらなければならないと思います。しかし、山谷さんのお話からみても、そうした方向に向かっていないくらいがあります。

いっしょに住んでいる私の母は今百三歳です。とても貧乏でしたが、限りなく優しく、本当に愛情豊かだったと思います。私には、全身全霊で子どもを愛してくれた母の記憶が鮮明にあります。昔の親たちは自分のすべてを犠牲にして、子どもを育てたと思います。昔の日本人はそれが自然にできたのに、今はなかなかできません。しかし、そこに至らなくても、みんなでその方向に進みましようというのが親学だろうと思います。

辻 現在、子ども子育ての支援システムができあがりつつあるので、全国でニーズ調査が行われています。子育てで悩んでいる方がどこに相談するかという項目では、どこの市町村でも、まずはパートナーに相談するケースが一番多いのです。パートナーがダメなら、次に親戚や自分の両親に相談しています。ところが、パートナーとの仲も悪い、自分の親との関係も悪いということになると、一気に相談先がなくなってしまいます。

相談先がないから、あるいは、どこに相談したらいいのかわからないから、一人で迷い苦しみます。苦しんでイライラしたとき、思わず子どもに手をあげてしまうというのは、相談相手がないからなのです。核家族が増えて、昔のように「おばあちゃん、おじいちゃんにちょっと聞いてみるわ」という場なくなっています。かつて、リビングあるいは居間にみんなが集えたように、誰もが気軽に行ける場所が地域単位で、もっとあればいいなと思っています。

大阪の茨木市長と現役の赤ちゃんを抱えたお母さんたちとの座談会に参加したことがあります。そのとき、たとえば、予防接種などの情報をどこで得ているかという質問に、「公園で聞いた」、「ママ友ネットワーク」、「保育所で聞いた」と答えた方が多く、情報を身近な他人から得ているのがわかってきました。

その方たちに、「いつもどこに集まっていますか」と聞いたところ、みんな示し合わせたように「公園」と声がそろいました。公園に集ってようやく知識得られるというなら、それに代わる場所をつくれればいいと思います。今の子育て世代は、身内に聞くのが難しく、ちょっとだけ遠い他人に聞きたいと思っているということが見えてきました。それができる場所を国だけがつくろうとしても難しいので、地域の中で、「私がやる」という人に、どんどん手を挙げてもらって、お元気な高齢者から、「自分たちの世代はこうだったけれど、

今の世代はこうだから大変だね」という共感力を持って、知恵を授けていただきたいのです。悩みは誰かに話したら必ず軽くなりますから、悩む人が減っていくと思います。

櫻井 辻さんに、逆説的なことを聞きます。過日、ある若いパパと話をしましたら、彼の奥さんが今、ママ友のヒエラルキーから早く逃げたいと悩んでいるということでした。ママ友の中で、やっぱりリーダーが出てきて、その人の意見にみんな従わないと、それこそ村八分にされてしまうので、ママ友がいなければやっていけないけれど、早くママ友から逃れたいと、「うちのワイフはもうノイローゼ気味ですよ」と言っていました。こんなとき、どうしたらいいのでしょうか。

辻 そういう方は、たくさんいると思います。同世代だけが集まっているという知恵のない中で、ヒエラルキーをつくっているのが、誰かコーディネーター役が必要なのです。たとえば、PTAの中でヒエラルキーができたのなら、保育所の先生や小学校の先生に入ってもらおうという方法もあります。他世代とのつながりがまったくないところに問題があると思います。

力の強い者が弱い者を指導していいというのは、職権乱用です。対等な力、対等な目線での価値観のぶつかり合いではなく、上から下を支配してしまうお母さんというのは、そういう価値観を見て育ったということが大きいと思います。外部の第三者の客観的な目で教育していくということも必要ですが、これだけ横のつながりが希薄になっている社会が一番の問題だと思います。

櫻井 そこに介入すべき第三者がどういう人かといえば、親学の学びのエッセンスを知っている人なのだろうと思います。ママ友の頸木から早く逃げたいという、彼女の言うことに全面的に賛成しているわけではありませんが、子どもとの関係やママ友との関係をうまくやっていくには、価値観として必ずしも賛成しないけれど、従ったほうがいいという部分があるから、そうした感情が生まれてくるだろうと思います。親というのはこういうものですよ、子どもに対してはこう接すべきですよ、という社会全般で共有する価値観が不足しているから、こういうことが生まれてくるのだと思いますが、親学の観点から、この状況を具体的にどう解決していくことができるのか、解決の方向に背中を押してあげることができるのでしょうか。

高橋 埼玉の発達支援プロジェクトの話をしたと思います。先ほど述べました発達障害の二次障害というのが広がっていて、TOS Sという先生方のグループが六千人の調査をしています。たとえば注意欠陥多動性障害（ADHD）という、少し注意力が散漫な子、特定のことにこだわってしまう子、ふらふら歩きまわる子、こういう子たちを入れて、発達障害は、小学生のおよそ一六%だという結果が出ています。文部科学省は六・数%と言っていますが、これは知的発達の遅れを含んでいませんので、実際は、一割を超えているわけです。これを、どう解決しているか。私は上田知事に、大阪の木島幼稚園と橋波保育園を視察してほしいと提言しました。木島幼稚園では、三歳で言葉が出なかった子が二年間で言葉が出るようになり、すべての能力が向上しました。実際にビデオを見せてもらい

ましたが、確実に変わっていました。

あるお母さんが素晴らしい本を書いている、本人は今、京都大学の大学院後期博士課程で研究者を目指しています。

木島幼稚園では、月に何回か幼稚園の先生が指導員となって、まず障害をマイナスと受け止めないで、私は「心のコップを上に向ける」と言っていますが、その子どもがどういう状態でこういう行動を取っているのかを教えていきます。最初、お母さんは子どもの行動が理解できずに、心の中が騒いでいたわけです。ところが、そうせざるを得なくてそういう行動を取っているのだということが理解できたら、心が非常に落ち着いてきました。ある方は「発達障害ではなく、発達デコボコと言ったほうがいい」と言っていますが、発達の個人差なのだを受け止めることができれば、心のコップが上を向いて、パニックにならずに、心が落ち着くわけです。

次に、幼稚園の先生が具体的な関わり方を教えていきます。つまり、関わり方を教える人材を育てることが必要で、埼玉はそれを毎年二億円、今三年目の累計六億円の予算で、実践し、確実に成果が上がりました。

どう変わったのか数字で上げると、自閉症や注意欠陥多動性障害など、少し行動に通常でないものがある子どもの「行動に変化が起きた」というのが埼玉全体で六七・九%です。「具体的に言葉が出るようになった」、「みんなと行動できるようになった」、「乱暴な行動が収まりクラス全体が落ち着いた」というのです。

そして、保護者であるお母さん方に対しても、子どもへの関わり方や心のコップを上に向けるということを指導したところ、「感謝の言葉、笑顔が出るようになった」、「子どもの状態を受け入れられるようになった」、「保健センターと連絡を取るようになった」というのが八四・七%になりました。障害というものの受け止め方と関わり方をきちっと伝えれば、これだけの変化が起きるのです。

自閉症は一歳半で九〇%以上の確率で早期発見できます。また、一歳半健診のとき、ほめ方のパンフレットを全員に渡しています。そして、どう関わればいいのかという関わり方を具体的に教えていきます。

ギャルママ協会と対談したとき、「愛されたことがないから、愛し方がわからない。ほめられたことがないから、どうほめていいかわからない」と言われました。そういう親が増えているわけです。だから、マイナス志向からプラス志向に転換していく、心のコップを上に向けるというあり方と、専門的にはペアレントトレーニングと言いますが、幼稚園の先生、保育士、小学校の先生あるいは専門家が巡回しながら、親に対して関わり方を具体的に教えていくことです。

私たちが親学推進協会で、親学アドバイザーを千五百名近く育ててきました。そういう方たちが、ただ悩みや弱音を聞くだけでなく、具体的な関わり方もきちんとアドバイスしていけば、かなり解決すると思っています。

櫻井 発達デコボコというか、障害を抱えた子どもさんが、急速に増えているということ

ですが、そのことと、家庭教育はどういう関係にあるのですか。

高橋 第一次障害と言われる先天的な器質障害が増えているわけではありません。一〇%とか一六%とか急激に増えているのは、擬似障害と言う人もいますが、この区別はなかなか難しいのです。出てきている症状から見ると、後天的なテレビゲームなどの影響も関係してきていると思います。生育要因、環境要因が関係して発達障害と似た症状を示している子たちを「気になる子」と呼んでいます。そうした子たちが非常に増えてきたので、新型学級崩壊が起きているということです。

それは、愛着だけが原因ではありません。原因の一つとして、親との一体感がないため、子どもが不安感を持っている。情緒が不安定になる。そんなことが専門家たちから指摘されています。

櫻井 親たちの子どもに対する接し方は、重要な意味を持つわけですが、親は自分の手元で愛情を込めて子どもを育てたいと、みんな思っていると思います。しかし、いざやってみるとものすごく辛い。おじいちゃんもおばあちゃんもない。お友だちもない。辛くてイライラしてしまう。そんなお母さん方がいて、それでも、この女性たちにもっと働きなさいと言っているわけです。そして、東京都などでは零歳児から子どもを預かるということ、これまで何年間もやってきています。零歳児といたら、生まれて一ヵ月、二ヵ月、抱いてみても、もう怖いくらいに脆い存在ですけど、そんなときから親と離されて、優しい保母さんだと思いますが、その方たちの手に預けられる。預かりますから、あなたは働いてくださいという、二つの流れを納得できるかたちで、どう融合させていくのか。日本は子どもが少なくなりますから、一人ひとりの子どもをもっともっと大事に育てていかなければなりません。

子どもが少なくなるのは女性たちが子どもを産まないからですが、なぜ産まないかといえば、やっぱり大変だ、お金がかかる、自分のことをしたいなどと、いろいろな要因があると思います。これを政治の分野でどう解決していくことができるのか。

義家 今は共働き家庭の話でしたが、わが家は専業主婦です。妻は今、勉強の指導を巡って、息子と毎日喧嘩をしているようです。しかし、私は妻と二人のとき、必ずこう言います。

「五歳までのあの愛おしい時間を過ごすことができよかった。本当にその時間が私にとっては財産であり、宝だ。だから、あのときを思い出せば、どんなことがあっても頑張っていける」

そして、いつも彼女にこう言っています。

「世の中は、仕事、仕事と言っているけど、子どもを命がけで産んで育てる以上のすごい仕事なんかどこにもないぞ」

私はずっと仕事をしてきました。しかし、妻が息子を産んで向き合い、健康に育てていることは、仕事とは比較にならないほど尊いことです。だから、みなさんがどうしてそう感じるができないのかなと思います。

「義家は男尊女卑思想の持ち主だ」と勘違いする人がいますが、反対です。私は女尊男卑です。男なんて、家族が安心して暮らせるように歯を食いしばって仕事をするしかできない存在です。だから、ワーク・ライフ・バランスなどと言われると、はてな？なのです。少なくとも、私は自分の守るべき者のためにワーク・イコール・ライフです。ワークしなかったら子どもたちや家族を守れません。もし、お金が足りないようなら、私は妻が安心して子育てできるように人の二倍、三倍、馬車馬のように働きます。こういうマインドを取り戻さない限り、私は無責任が続くと思っています。

大事なのは、共働きの理由です。私の周りを見ると、共働きのほうが豊かで、子どもがいないほうが海外旅行も自由に行けるといった発想です。確かに豊かさは大事です。しかし、ただ単に今ある生活が苦しいのなら、私は二倍働きます。それは子育てを無責任に放棄する理由にはならないと思っています。

息子は今度、小学校五年生になります。五年生になったら、ある程度のことは一人でできます。そうなったとき、子育てで休んでいたお母さんたちがキャリアを生かして、再び社会に出ていくためにどんな支援をしていくのか。大学の学び直しの講座だったり、資格取得だったり、あるいは企業の理解だったり、こうした支援を政策として進めていけると思います。

子どもが立って歩いて、そして自立の階段を上り始めるまでは、安心して子育てに没頭していいと思います。そして、母親として最初のステージが終わったら、今度は社会でその能力を発揮していただくために、こういうステージで学び直しや資格や機会を用意しますというのが、本来の政府のあり方ではないかと思っています。

昭和四十年代から、保育サービスという不愉快な言葉が現われました。子どもを預かることはサービスなのですか。共働きで保育園に預けるのなら、少なくとも前提としては預かっているという気持ちが必要です。本来、われわれ夫婦が担うことですが、こういうライフスタイルの中でどうしても支援が必要です。どうか預かってくださいというマインドで、保育園も預からせていただいているのでなく、保育サービスをしているのではなく、幼児教育を担っているという自覚の下で預かるのですから、自由化ありきではありません。子どもをぼっと預ける箱としての待機児童ゼロ作戦だったら、本当に大変なことになると思います。基準が厳しいと言いますが、かけがえのない子どもさんを預かるのですから、しっかりした基準があるのは当たり前です。待機児童をゼロにすることと無責任な幼児保育サービスを提供することは、まったく矛盾することだと思います。

厚生労働省所管の保育園と文部科学省所管の幼稚園を一つにまとめて、どんな幼児教育をつくっていくのかという具体的な議論が行われています。少なくとも日本の未来を背負っていく大切な子どもを預かるに足る場所をつくらなければなりません。また、そこで働いている人たちも誇りと自信を持って、親の代わりにしっかりとその子を育てるという役割を自覚しなければなりません。お互いへの尊敬、感謝という前提を取り戻さないまま、単に数だけ増やして、待機児童ゼロ作戦を進めていったら、きっと寂しい子どもだけをつ

くってしまうと思います。繰り返しになりますが、私は子どもを命がけで産み育てる以上の仕事など、この世の中になんかと思っています。

高橋 今、安倍政権の正念場が問われていると思います。一番の試金石は、少子化対策を転換できるかどうかということです。少子化の一番の原因は未婚化ですから、これまでの少子化対策は保育サービスの量的拡大に重点がありました。それを進めてきたのは自民政権です。民主党政権もそれを継承しましたが、これは、若い女性を働かせて税金を納めさせたほうが得だという経済政策なのです。

山谷さんがかつて「あったかハッピープロジェクト」をまとめたときには、「幸福の物差し」という視点が入っていました。一方、保育サービスの量的拡大というのは、「経済の物差し」です。子ども手当も同じです。問題は「経済の物差し」と「幸福の物差し」をどう両立させるかということです。残念ながら、経済と幸福の物差しを両立させるという考えがまだ足りないと思います。

アベノミクスによって安倍政権は浮揚しているわけですから、アベノミクスを否定はしません。女性の労働力活用も大事です。しかし、女性の労働力活用というとき、男性の問題がやっぱりあります。今のように本来の母親というものを子どもから奪ってしまったのは、経済の物差し一辺倒できた一つの反映です。

たとえば、二〇〇七年の調査で、「将来、偉くなりたい」と答えた日本の高校生は、わずか七%です。子どもたちは、私たちの時代のように経済の物差しだけで、立身出世をめざしてきて、それで幸せなのかと問い始めているわけです。子どもの夢のランキングというのが『琉球新報』に一九七八年からずっと載っています。女の子の夢で「お母さんのようになりたい」は八位でしたが、それが落ちていくのは学級崩壊が始まった年からです。男の子の夢で「お父さんのようになりたい」は五十番にも入りません。お父さんが家で役割を果たさないから、母親がその役も果たさないといけない。そして働かねばならない。これでもう母性が潰されてきているという背景があります。

これは女性だけの問題ではなく、半分は男性の責任で、もう一度、父親が父親としての役割をきちっと果たしていかないと解決しない問題です。そして、経済の視点と幸福の物差しの両方の視点で考えていかないと解決しません。このことをはっきりと安倍政権の中核部に問わなければならないと思っています。

内閣府の広報誌『共同参画』に、少子化対策のパラダイム転換が必要だということを書きました。松田茂樹中京大学現代社会学部教授が『少子化論』の中で、典型的といえる家族が八割あると書いています。子どもが小さくてもフルタイムで働いている女性が約二割です。あとは、専業主婦と、子育て期は子育てに専念して子どもが大きくなったら仕事に就きたいと思っている女性で、この合わせて八割の典型的家族に向き合える環境整備をどう図るのかということが、少子化対策で一番大事なことだということです。

結婚、妊娠、出産、子育てに対するプラスイメージの教育も親になるための学びです。

たとえば、私が埼玉県教育委員長時代に、百時間以上かけて家庭科の教科書を調べまし

た。そこには、独身生活の利点を書いてありました。なぜ、独身生活の利点を教える必要があるのでしょうか。家族の定義も問題でした。やはり親になるための準備教育にもっと力を入れる必要があります。それが未婚対策です。そういう方向に舵を切らないといけません。むろん、従来の経済支援を全部否定するわけではありません。経済的支援と両立するかたちで、幸福の物差しを政策として立てないと、単なるアベノミクスだけで終わってしまい、それだけでは日本は取り戻せません。

長谷川三千子先生が書いていましたが、二〇〇四年の人口が一億二七八四万人で、ピークだったのです。このままの出生率で進んでいけば、百年後は四〇〇〇万人ぐらいになり、二九〇〇年に千人、三〇〇〇年にはゼロになって、実際に日本が亡びるということです。少子化問題を本気で考えると、今、政策転換が必要です。そのことを安倍政権は正念場として、しっかり受け止めてほしいと思っています。

櫻井 教育を考える場合、ただ単にどんな知識を頭に入れるか、どんな倫理観を身に付けるかということだけではなく、実質的に日本国の未来を左右する子どもの数が少なくなり、日本人がいなくなるという可能性も考慮に入れていかなければなりません。そこまで広げて、この問題を論ずべきだと思います。

会場からの質問 授業を聞かない生徒、教師に暴力を振るう生徒たちがいるという現実があります。一方、教師は愛の鞭を禁じられ、そうしたことも含めて教師がやる気がなくなっている学校もたくさんあると思います。まず、こういう事情のある現場をどう改善していくべきなのでしょう。

高橋 数日前、広島県の警本部に呼ばれて、親を対象に講演をしました。そのとき、縦割り行政を廃して、福祉の方、児童相談所の方などいろいろな方が集まって対策会議をやりました。そのあとの懇親会でも三十人ぐらいで大激論しました。その中で、中学生が先生のネクタイを持って、「俺を殴れねえだろう。殴ったら処分だよな」と言ってくるという話が出て、それを広島では許さない。対教師暴力としてきちっと取り締まるということでした。今までは、警察と教育委員会の間に壁があったわけです。大津のいじめ事件で、すぐに警察が受理しなかったのは、これは教育問題だから、教育委員会の管轄だと考えてきたからです。

今、いじめの中にも明らかに犯罪があります。それに対して、誤った子ども中心主義で、指導をしてはいけない、支援に転換しないといけないという考え方が広がってきています。これは産経新聞の「金曜討論」に書きましたが、ある市で子どもの人権を尊重するという条例ができて、「あんたのようなレベルの授業で給料もらっていいのか」と言ってきた子どもがいて、その教師は辞めました。その他、授業を受ける権利を守るために席替えをしてほしいという誤った子ども中心主義のために、先生が自信を持って指導できなくなったり、萎縮してしまったりしています。

大事なのは優しさに裏打ちされた厳しさだけが、子どもを変えるということです。その原点が一番大事で、『窓ぎわのトットちゃん』の中で私が学んだことは、「本当はいい子な

のに」と言って、黒柳徹子がトモエ学園の校長先生から叱られたということです。「本当はいい子なのに」と、人格の良さをしっかり信頼し、温かい愛情の中で、行為をびしっと否定する。これは行為と人格を区別していますから、人格を切り捨てません。そういう優しさに裏打ちされた厳しさをしっかり教育現場で持っていくことが大事で、それがなければ、体罰ということになります。優しさに裏打ちされた厳しさとは、アクセルとブレーキ。父性と母性です。アクセルとブレーキのバランスがやはり大事ですから、その原点をもう一度、教育現場で取り戻せるようにしないと、どんどん熱血教師が退いていって、教育現場が混乱してしまうでしょう。今、誤った子ども中心主義を脱却することが大事な課題だと思っています。

櫻井 授業を聞かない生徒、教師に暴力を振るう生徒が、小学校からいます。私も取材した学校で実際に見ました。雨が降った日、階段の踊り場の真ん中で、小学校の五年生が女の先生を囲んで傘で突き、すごい怪我をさせました。大変な事態でしたが、学校は警察に届けもせず、先生が泣き寝入りさせられてしまったのです。

一方で、このとき「この馬鹿者」と言って、子どもを殴ろうものなら、それこそ新聞が書きたてるということがあります。子どもを守ってあげるとはとても大事です。しかし、子どもが暴力を振るって、先生が蹴飛ばされるというような実態もあります。その子どもたちに対して、どう対処できるのか。学校現場はこれをどう守り得るのか。学校行政でいったいどういう手を打っているのか、いないのか。

義家 九年前まで、私は日本で一番教育困難といわれている学校の教師をしていました。少年院から真っ直ぐ来る子もいれば、いじめられていて小学校から不登校だった子が隣の席に机を並べるといふ、すべて学級崩壊がスタートという学校でした。しかし、私のクラスは絶対学級崩壊しません。いじめが起こっても、初期の段階で必ず生徒が言いに来ます。荒くれ者もいますが、私は体罰をしたことはありません。正確に言えば、取っ組み合いの喧嘩はしたことがあります。しかし、道具としての体罰はしていません。する必要がないからです。

人生のすべてを背負っているおとなが、存在をかけて本気で向き合えば、茶坊主に負けるわけがありません。子どもが怖くて、小学生にもちゃんと教えられないような先生は率直に言って辞めたほうがいいと思います。

根本の原因は、組織率八割以上を誇った日教組が自分たちのことを教育労働者と定義したことです。これがモンスターペアレントの根源でもあります。教育労働者ですから、雇用者は誰かと言えば、税金を払っている親です。だから、先生が尊敬されるわけではないし、当然、生徒が尊敬するわけありません。

それが根幹にあると思いますが、民主的という言葉も教育現場では勘違いして使っています。たとえば、毎年新学期が始まり、五月になると生徒が、「先生、そろそろ席替えしようよ」と言ってきます。私は必ずこう答えます。「OK。じゃ、来週の頭までにつくってくるから」。すると生徒が「先生、それおかしいよ。僕らは小学校のときから民主的にみんな

で話し合っ、くじ引きして席を決めてきた。なんで先生が決めなきゃいけないんだ」。

そんなとき、「どこのサッカーの監督が選手のポジションをくじ引きで決めるんだ。どこの野球の監督が生徒のポジションと打順をくじ引きで決めるんだ。このクラスの監督は先生だ。おまえたちはお互いに理解し、認め合い、励まし合い、支え合っていないだろ。先生はあらゆる人間関係を考えて、席という最も大事な布陣を徹夜で考えてつくっているんだ。大切な布陣をくじ引きなんかで決めさせるか」と言ったら、生徒は納得します。私のクラスが学級崩壊しないのは、そういうことなのです。

クラスが成熟してきたら、それなりに生徒たちに話し合わせればいいわけです。うるさい生徒がいて、仲良くなった隣の子と騒ぎ出したら、すぐ席替えです。その生徒は必ず義家シートと言われる前の席に来るようになっていきます。後ろにいたら、私が授業中怒ったら、まじめに授業を受けている真ん中の人が迷惑だし、嫌な思いをします。義家シートは私の真ん前ですから、他の人に迷惑をかけることはありません。

このぐらいの自信と誇りを持ったクラスコーディネーターが必要だと思います。

たとえば、席の縦の関係では、プリント一枚無愛想に回されただけでも、いじめられたと感じてしまう弱い子もいます。だったら、その子の前の席には、優しくて笑顔の素敵な子をつけてあげよう。面倒くさがらない子をつけてあげよう。そして、横の関係は、英語の授業でも何でも一番大事ですから、その子の隣にはこれからリーダーを背負ってもらう子にやってもらおうと、面談をし「彼の隣にするから、よろしく頼むぞ」と言って、責任を持たせて隣にするわけです。

さらに、体罰はいりません。懲戒にすればいいのです。昨年も多くの子もたちがいじめで自殺しているのに、いじめを理由にした出席停止はゼロ件です。出席停止は教育的指導であるという解釈なのです。やはり、出席停止は懲戒として位置づけるべきだと思います。そして、受け皿になるのは保護者です。保護者が仕事を休んででも、子どもが反省するまでは向き合わなければいけません。それが親としての責任の全うであって、保護者を大事にするあまり、教育委員会が、場所を設定して先生をつけ、他人を不登校や自殺に追い詰めた人間と向き合っても、どうにもならないと感じます。

民主教育という名の下に、無責任教育が行われてきたわけですから、その意識改革から始めなければならないと思います。

質問 今びっくりするような状況が保育園の現場で起きています。働きたいから保育園に入りたい。もしくは、保育園に入りたいから働きたい。そんな親が急増しています。私にはその心理がまったく理解できません。もう一つ、教師は労働者だと言って、自分たちの権利ばかりを主張する日教組の人たちを、政治の力で変えることができるのかどうか、お聞きします。

質問 私は、教員を長くつづけている中で、これから先どうしたらいいのかをずっと考えてきました。やはり一つ目は家庭の教育。要するに保護者の方をなんとか教育することを

考えていくしかないのかなと思っています。

もう一つは、先生の教育だと思います。今入ってきている若い先生たちは、最初からやる気をなくして、安定だけを求めて入ってくる先生が多いというのが現状です。そんな先生たちをどうしたら、もう一度、情熱ある先生に復活できるのかというところで、いつも悩んでいます。それから、働いているお母さんたちがとても多いということですが、救える道は地域ではないかと思っています。地域の力を復活させて、退職された方とかを中心に子どもをいっしょに育てていくという環境があればいいなといつも思っていますが、そのへんをどう考えているのでしょうか。

櫻井 保育園に入れたいから働きたいということについて、辻さん、細川さんに一言ずつ。それから、先生が労働者になってしまった。よい先生をつくるにはどうするかという問題と、今の先生は最初からやる気がない。安定のみを求めているという問題について、高橋さん、義家さんに伺いたいと思います。さらに、働くお母さんを地域としてどうやって助けていくことができるか、辻さんをお願いします。

辻 保育所に入れたい母親の心理ですが、子どもをどう育てていいのかわからなさすぎるからです。ちょうど今、親をしているのは偏差値教育で育ってきた世代で、百点満点をもらうことで自己肯定感が生まれてきた世代です。しかし、子育てには当然ながら正解がありません。どこへ行っても減点はされますが、お母さん偉い、すごいという加点をなかなかされません。一日中言葉がまだ通じない乳幼児と接していて、こんな思いをするのなら、保育所でおしめも取ってもらい、ごはんの食べ方も習って、わからないことは保育所の先生に聞けばいいという状態が悩まずにすむから気持ち楽なのです。そして、自分も子どもと離れた時間があると、迎えに行ったときに、「なんてかわいいの、うちの子」と感じ、愛情が爆発するのです。

煮詰まった部屋の中で、母と子二人だけが孤立してしまうのはよくありません。誰かが風通しよく声をかけてあげたらいいので、地域力が大事ですが、一方で、子育てにはこういうことが待ち構えています。心配しなくても大丈夫ですよ、といった親学なり何かしらの教育をしていかないと、親の負担が大きくなり、日本の少子化はどんどん進んでいくと思います。

細川 私は少々厳しくて、それは単なる育児放棄でしかないと思います。子育てには、百点がないということもありますが、やっぱり辛いのです。母親は、四六時中ずうっと子どもに付きまとわれて、トイレ行くのもままならないほど自由がない。だから、子どもから離れたい。ただそれだけだと思います。

また、ママタレという、子どもを産んでも芸能活動を続けるきれいなタレントさんが、もてはやされ過ぎて、テレビにも雑誌にもよく出てきます。すると、子どもを産んでも自分のキャリアがある、仕事があるのはとても素晴らしいことだと普通のお母さんが思ってしまいます。私は、かつて輝いていたタレントさんが、結婚や出産を機に、ぱっと一線を退いて家庭に専念をしているほうが、ずっと素敵生き方だと思っています。

ただ、共働きでも決して裕福ではないのは、私のようにフリーだと公立の保育システムは利用できません。すると、ベビーシッターにお願いすることになり、いくら働いても、ベビーシッター代に消えていきます。だから、経済的に余裕ができるということより、仕事をやり続けなければならないという使命感のようなものでやってきましたので、もう少し保育のシステムにバリエーションがあるといいなと思います。

保育園に行かないと支援が受けられないというのでなく、誰かに家に来てもらって二、三時間、自分の手が離れる。それだけでも十分だと思います。そこには今、公的な補助はゼロです。自治体でやっているところもありますが、上限があります。

最後に、仕事は生易しいものではないと思いますので、保育園に入りたいから働くという方たちに気をとられないほうがいいと思います。

義家 まず組合の問題ですが、教育公務員特例法の抜本改正を行います。この特例法において教師は専門職であると明確に位置づけたうえで、待遇や処遇の適正化を図るため、私を中心になって準備をして、教育再生推進法という法律を今国会に提出します。さらに違法な活動をしている組合については、人事委員会規則を変えて、やはり団体交渉の対象の組合とは認めないということは当たり前だと思います。団体交渉権があるなら、教育公務員としての責任があります。これはセットですから、責任は果たしません、交渉権だけくださいというのは成り立ちません。平日にもかかわらず、特定秘密保護法のデモにも、先生方がたくさんいました。それはきっちりと適正にするということで、教育公務員特例法を改正していきます。

さらに、教師の資質向上については、免許法の改正を行う議論をしています。たとえば、私は東京都教育委員会から教員免許状をもらいましたが、東京都で教員をしたことはありません。北海道です。つまり、発行権者と採用権者が違うわけです。ですから、学部が終わったときは、基礎資格としての准免許状として、採用された後、一年なのか何年なのかは議論の余地がありますが、学校長が責任と自信を持って、設置者である採用した教育委員会に対して、この先生はしっかりした先生であると申請し、本免許状を当該採用教育委員会が発行していくということが必要だと思います。

私学の場合は、学長、校長が学事課に上げて、教員免許状として教育委員会が発行していくという新たな仕組みをつくらない限り、新しい先生が入ってきても、また同じことが繰り返されていくと思います。

また、先生に誇りと自信を持ってもらうことは何よりも大事ですから、そこへの支援です。口だけで頑張れと言っても、先生が潰れてしまっただけは意味がありません。やっぱり頑張った人がしっかりと処遇され、守られ、誇りと自信を持って向き合える状況に改善していく必要があるだろうと思っています。

高橋 私は師範塾を東京、大阪、埼玉、福岡で十年以上にわたってつくってきました。ここでは、先生方に「親が変われば、子は変わる」と言いません。どんなに親心が衰退していても、「教師が変われば、子どもは変わる。授業で、学級経営の中で勝負してください」

と言ってきています。まず、志を持つ必要あります。教員採用試験に受かったとたんに元気がなくなった教え子がいたので、どうしたのかと聞いたら、「小さいころから先生になるのが夢だった。その夢を達成しちゃったので」と言いました。何のために教師になるのか。それは、やはり歴史に学ばないとダメです。吉田松陰は、指導について、「真に教ふべきことありて人の師となり、真に学ぶべきことありて人を師とすべし」と述べています。そういう指導というものが無いと、教師は自分自身の心を磨いていくことができないのではないかと思います。

教育基本法にも「修養に励み」とあります。教養ではありません。修養ですから、自分自身と向き合うということを鍛える必要があると思います。

アメリカで、ゼロ・トレランス方式が見直されています。民主党政権下で、学力と規律が低下してきたため、バック・ツー・ベーシックス、基本に帰れという全米の運動が巻き起こっています。ゼロ・トレランスというのは、寛容でないという意味です。教育にもっと厳しさを求め、教育的な配慮はしないということ、広島では見つめ直しています。生徒が教師の胸倉をつかんだら、それは秩序を害するもの、対教師暴力ということで毅然と対応する。そうしたものを取り戻さないと、先生方のプライドも取り戻せないと思っています。

もう一つ、師範塾で私が言っているのは、親への関わり方です。その第一点は、どんな理不尽なクレームも、まず宝の山だと思えということです。これは修業なのです。

まず丸ごと受け容れる。今はファシリテーターで、はい、どうですか、どうですか、それだけで終わっています。そこで終わってはダメで、どう関わるのかという関わり方についての科学的知見や情報を伝えるように教えています。たとえば、ゲームをやると脳にどのような影響を与えるのか。中国、韓国、日本でシンポジウムがありましたが、明らかに脳に障害があります。あるいは、大阪大学の調査では、親切な行動をしたら、親切が返ってくるということでした。子どもは親切な行動を見たら、自分も親切にするのです。そうしたことが脳科学でだんだん目に見えるかたちで出てきていますから、脳の映像を見せて、伝えていくことも大事ではないかと思います。

櫻井 働くお母さんたちを地域でどう救っていくべきでしょうか。

辻 埼玉県で上田知事が進めている「埼玉県家庭教育アドバイザー制度」があります。親の学びをきちんと学んだアドバイザーをたくさんつくって、家庭や保護者を地域で支えていこうと予算を取って実施されています。そうしたサポーターさんをどんどん増やしていけば、その方が核となって地域を支えていけるのではないかと思います。

櫻井 これからの一年間、国基研は教育問題を一つの大きな柱として、取り組んでいきます。日本民族を継続していくためにも、教育の問題、価値観をどう形成していくかという問題は非常に重要だと捉えていますので、これからも引き続き関心を持っていただければと思います。